



新パッケージ展開図



新パッケージのデザインには避暑地を思わせる爽やかなブルーを採用した。

長年親しまれている、昔ながらのパッケージ。

湯せんへい

外国人の避暑地として賑わった雲仙の歴史をパッケージに詰め込んで



遠江屋本舗

雲 仙温泉と小浜温泉のお土産として知られる「湯せんへい」は、小麦粉、砂糖、卵、そして温泉水で作られるシンプルなお菓子。

主原料である小麦の穂と「湯煎餅」の文字が目飛び込んでくるデザインは、上部の屋号以外は全店共通だそう。昭和二十年代から雲仙の温泉街で湯せんへい屋を営んでいる遠江屋の三



代目・加藤隆太さんは「昔から型のデザインは変わらない」と話す。

それは島原半島の鳥瞰図が使われているパッケージも同じ。これは観光旅行がブームとなった大正から昭和初期に全国の名勝地の鳥瞰図を描き、一世を風靡した吉田初三郎によって描かれたもの。

遠江屋には、この昔ながらのものと並行して、数年前に新たなパッケージが登場した。「これも吉田初三郎が同じ時代に描いた鳥瞰図なんです。実は外国人観光客に向けて描かれたものなんです」と加藤さん。

雲仙は明治中期から昭和初期にかけて、外国人の避暑地として親しまれた歴史を持つ。「雲仙

が外国人の避暑地として賑わった時代と、湯せんへいが生まれた時代は重なるため、これなら湯せんへいをもっと雲仙らしい形で表現できると思いました」。

遠江屋では、一枚手焼きにこだわっている。昔ほどの店でも一枚手焼きだったそうだが、手間がかかるため、今ではここだけになってしまった。「こうして湯せんへいを焼く姿は、雲仙地獄と同じように雲仙の見どころの一つだと考えています。だからこそ残していきたいんです」。

お土産とは、一緒に旅へ行けなかった人へ、その土地の魅力を感ぜてもらうためのもの。雲仙が丸ごと描かれたパッケージに包まれた湯せんへいは、真のお土産と言えるかもしれない。

雲仙には、パッケージの鳥瞰図にある、約90年前と同じ風景が今も広がっています。



加藤隆太さん

1978年、雲仙市生まれ。遠江屋本舗の三代目。29歳で家業を継ぐ。「湯せんへい＝和菓子」の概念を覆すべく、湯せんへいにクリームを挟んだ「温泉ゴーフレット」を開発するなど、新たなチャレンジを続けている。

長崎のデザインを旅する
Design in Nagasaki

可 愛らしいツシマヤマネコの顔がドーンと描かれたパッケージの中は、対馬市佐護地区で栽培された「佐護ツシマヤマネコ米」。

ツシマヤマネコとは、対馬だけに生息する希少な野生動物で、田んぼを暮らしの場として利用しており、佐護地区ではツシマヤマネコと共生した米づくりが行われている。

吉野由起子さんは、二〇一一年に「島おこし協働隊」の「島デザイナー」として、東京から

対馬へ移住してきた。もともと写実的な動物の絵を得意としていたことから、自然に囲まれて動物や野鳥、魚の絵を描く島での生活はとても楽しいと話す。

対馬にはそれまでも、ツシマヤマネコをモチーフにしたグッズがたくさんあった。しかし吉野さんは「ツシマヤマネコの生物学的な特徴を正確に捉えているものは、一つもなかったんです」と話す。吉野さんの描くツ

シマヤマネコは実にリアル。顔の輪郭はもちろん、ツシマヤマネコの特徴である額の縦じま模様、丸くなっている耳の先、耳の裏側にある白い斑点まで忠実に描いている。「デザインに取り組む前に、まずはヤマネコをはじめとする島の生き物たちを観察しました。ホンモノと出会うことでよりリアルに表現したいという気持ちが高まりました」。

しかも吉野さんは「農家の皆さ

んに少しでも早くデザインを見せたい」と、印刷ではなく得意の消しゴムはんこで、ツシマヤマネコを表現することにした。

その後、この図案をベースとした商品は次々と生まれた。吉野さんは「対馬は固有種が多く、生き物を描くには魅力的な場所です。これからは対馬を拠点に活動し、恩返しがしたいですね」と話す。島デザイナーのさらなる活躍が楽しみです。



消しゴムはんこは、手描きでは出せない優しい雰囲気。「ツシマヤマネコの暮らしの場を守りながら米を作る」という、生産者の気持ちが伝わってくる。

吉野由起子さん

1978年、東京都生まれ。2011年に対馬市へ移住。2013年、一般社団法人MITを設立。地域の資源や魅力を発見し(みつける=M)、それらをかき(いかす=I)、多くの人に伝える(つなぐ=T)ことを目的に、コンサルティングやデザインなどを行っている。



お弁当箱やポロシャツなど、さまざまな商品販売しています!

自然と人のくらしをつなぐ 佐護 ツシマヤマネコ米



3合袋



ギフト用の「みつめるにゃんBOX」



サステナブルショップ・ミット